

# 爪かき地蔵

中台と歩く

匝瑳  
探訪

-79-

匝瑳地区松山区の匝瑳小学校を過ぎ、県道106号線を進み中台区に入ると、墓地の隣に小さなお堂があります。

この中に、高さ約1・5メートル、幅約0・85メートルほどの砂岩（飯岡石）に地蔵菩薩が書かれた凶像板碑がまつられています。

この碑の裏面に鎌倉時代の1253年（建長5年）の年号と僧侶名が刻まれ、この年号が県内最古とされたことから昭和34年に千葉県文化財に指定されました。製作年代、

性格については研究者の間で意見が出されていますが、中台区では「爪かき地蔵」と呼んで、加持堂にまつり信仰されています。

「爪かき」とは細い線で描かれていることによるもので、この地蔵には次のような言い伝えがあります。

むかし田部（香取市・田山田町）にかかっていた石の橋を馬に乗った人が渡ると落馬しました。そこを通った人がこの石を中台に運んでまつたのが、この「爪かき地蔵」といいます。



爪かき地蔵がまつられている中台区の加持堂

筆者が40年ほど前に山田町で調査した時にこの話を耳にし、また最近になって、かつて水戸藩（茨城県水戸市）お抱えの植木職人だったという中台村の人が水戸からの帰りにこの石を持ち帰った、とも伝わっていると聞きました。

そこで、なぜこうした言い伝えが田部と中台に残っているのか考えてみました。一つの手がかりが『千葉大系図』に、木内胤俊という人が建長5年に田部村に地蔵尊をまつたという記録です。これが「田部地蔵」で、造立年が中台の「爪かき地蔵」と同じことから結びついたのかも知れません。

加持堂の中には、もう1基1461年にまつられた凶像板碑があります。これには、米倉・西光寺や八日市場・見徳寺（ともに中央地区）を開いたとされる僧侶・鏡照の名が刻まれています。

ぬくもりの郷の建設にともなう発掘調査で中世の寺院跡が見つかり、この板碑や1450年代の記録に「匝瑳庄福岡村見徳寺道場」などあることからこの周辺が宗教活動の拠点だったことがわかります。

現在の大字にあたる江戸時代の村が成立したのはおよそ400年前とされますが、中台村ははじめ松山村に含まれていて、分村したのが250年ほど前からと考えられています。

同秘書課広報聴班